

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00380

研究課題名（和文）20世紀前半の中国映画が果たした政治的役割：制作と受容の連動関係からの再考

研究課題名（英文）Reconsidering the Political Role of Chinese Cinema in the First Half of the 20th Century: The Interplay of Production and Reception

研究代表者

菅原 慶乃 (Sugawara, Yoshino)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：30411490

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は20世紀の中国映画が政治宣伝メディアとして果たした役割について、映画の受容史を制作史と連動される観点から再評価することを目的として、以下の2つの点からアプローチした。(1)従前見過ごされてきた映画の持つ教養メディアとしての側面から初期映画史を再検討し、不可視化されていた教養ある観客層の映画受容状況について明らかにした。(2)中国映画がナショナリズムや社会改良のメッセージを伝えるメディアとして、広く中国内外で受容された過程を分析した。新たな課題として映画説明書などの映画関連資料の利活用について考察を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従前の中国映画史研究においては、1920年代までの映画は外国から輸入された映画であっても中国国内で制作された映画であっても娯楽的なものとされ、1930年代になると急速に抗日プロパガンダの工具としての政治的利用が台頭したとされている。しかし、通俗的な娯楽である映画がなぜ突如として政治宣伝工具と見なされ、かつ長期間安定的に利益を出すことができたか、という基本的事実は、今日に至るまでほとんど検討されていない。本研究はこの問題を映画の受容史を核とした領域横断的アプローチにより克服するものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to reevaluate the role of Chinese cinema in the 20th century as a medium for political propaganda, approaching it from the perspective of film reception history in conjunction with production history. The study is approached from the following two points: (1) Reexamining early film history from the conventional aspect of film as an educational medium, focusing on the reception of films by an intellectually inclined audience that had been previously invisible. (2) Analyzing how Chinese films were widely accepted both within China and internationally as a medium conveying messages of nationalism and social reform. Additionally, the study explored the utilization of film-related materials such as film brochures, identifying new challenges in their application and research.

研究分野：映画史

キーワード：幻灯 スクリーン・プラクティス 観客史 女性観客 映画説明 公共圏 男装 華僑・華人社会

1. 研究開始当初の背景

映画は、中国の為政者や社会改良の実践者たちにとって両価的なメディアだった。教具としての映画の有効性は早くから注目されていたが、市場には犯罪映画や色情的な映画が流通した。しかし映画は 1930 年代半ばに急速に政治化し、「抗日」を主題とした国防映画の製作が急速に進んだ。抗日映画は海外華人社会にも流通し、映画を通じて越境的な抗日ナショナリズムが形成された。従来の「左翼」映画史研究やメディア統制史研究によれば、映画の役割の大転換の契機は日本の中国侵略であるとされた。しかし、通俗的な娯楽である映画がなぜ突如として政治宣伝工具と見なされ、かつ長期間安定的に利益を出すことができたか、という基本的事実は、今日に至るまでほとんど検討されていない。

20 世紀初頭の中国映画が担った政治的役割の解明を阻むのは、「映画は娯楽であり大衆に理解され易いため、政治宣伝に役立つ」という根拠無き通説である。中国映画史研究では、興行・観客史等の「受容史」研究が絶対的に不足しているため、政治宣伝メディアとしての映画の有効性や社会への影響が客観的に検証されるは無かった。したがって、如上の通説が示すように、映画による政治宣伝が広く観客に受容されたという見方が無批判に学界の前提とされてきた。その結果、学界の関心は映画作品に反映された政治的思想の解釈や文芸政策史が中心となり、本来究明すべき映画の政治性の検証、すなわち、プロパガンダ映画制作の継続を支えた観客による映画鑑賞文化の実像の解明や、政治的な映画の市場の実態や採算性の検証等、制作と受容の連動をめぐる諸々の事象は空白のまま残されている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20 世紀に中国映画が担った政治宣伝メディアとしての役割とその意義を、制作と受容との連動という観点から包括的に再構築することである。新聞や雑誌、公文書等の一次資料に基づき、文芸史、政治史、産業史、現代史の各領域を横断する学際的な見地から、映画受容史における次の 2 つの点を明らかにした。

(1) 「教養としての映画文化」の成立史研究：映画雑誌等の文芸メディアを映画ファンが享受することで、映画が教養化、学問化した過程を解明する。

(2) 「中国映画のグローバル市場」の実態の把握：ナショナリズムや社会改良等の政治主張を伝播しうる信頼のおけるメディアへと昇華された映画が、中国内外の華人社会で広く享受されたことで、トランスナショナルな抗日ナショナリズムが強化された過程を明らかにする。

3. 研究の方法

研究開始時期が新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックの最初のピークと重なったため、研究の将来的な見通しが極めて不透明な状況のなか、手探りで進めていくことを余儀なくされた。2 年目、3 年目も特に外国出張を実施することが困難な状況が続き、また長引くパンデミックによって研究代表者個人の私的状況にも大きな変化が生じた。他方、近年中国近代史関連資料の影印本や復刻版の出版が相継いだこと、インターネット上の各種資料アーカイブの充実度が急速に増し、かならずしも実地で資料収集を実施せずとも研究を遂行することが可能となる状況が生じた。このような変化を受け、2022 年度の研究開始直後の段階で外国への資料収集は実施しない方針に切り替えた。さらに、既存の資料を再精査することで新たな事実や知見を発掘することに注力する方法を強化した。これにともない、研究の対象範囲を 20 世紀前半のみならず 20 世紀全般へと拡大させ、映画の受容史における政治性を長期的な視座から俯瞰的に捉える方向へと修正した。研究手法そのものに変更は加えず、主に受容史に関わる言説を雑誌、新聞記事、新聞広告、公文書、映画説明書や特刊と称させる印刷メディアなどから見出し、分析する方法を採用するとともに、言説分析に対応する映画テキストも必要に応じて分析を行った。20 世紀前半の中国映画作品についてはフィルムが残存するものが少ないため、現存する文字資料を収集し、梗概や鑑賞記に見える断片的な情報にもとづき再現したうえで考察を加えた。

上述した 2 つの研究目的のうち、(1) 「教養としての映画文化」の成立研究にかんしては、映画を文芸史、文化史、産業史といった観点から記述してきた従前の研究に欠落していた教育史という視点を導入し、先行研究において不可視化されていた映画に教養を求める観客層の存在を可視化することを試みた。また、同様にかつて不可視化されていた女性観客と女性観客による映画文化の実像についても基礎的な考察を加えた。(2) については、中国映画が海外に輸出・伝播するようになった 1920 年代を中心に、中国と日本との最初期の映画交流史と、中国映画のハワイ、及びサンフランシスコへの進出についての史的意義について実証的な研究を行った。

4. 研究成果

ここでは、本研究の研究成果を上述の 2 つの目的に分けて記述した後、研究遂行の過程で派生的に見出された新たな研究課題について概観する。

(1) 「教養としての映画文化」の成立研究

従前中国映画史研究がほとんど注目してこなかった教育史の観点から映画史を見直すことで映画鑑賞に教養を求める知的観客の存在の実像の事例を明らかにした。従前の映画史が想定してきた映画観客は主流社会の中核に位置する、中産階級以上の男性観客で一定の教養を持つ階層である。実際には多様な観客がいることは個別の研究、例えば女性観客や子どもの観客にかんする若干の研究は行われてきたものの、いずれも個別の基礎的な事例紹介にとどまっており、多様な観客の存在でもって映画史に再考を要請する問題提起にまで踏み込んだ研究は、筆者の近年の成果も含めて最近ようやく学界の一部で散見されるようになった。本研究を遂行する過程で、筆者はまず映画史の射程を近接するメディア文化との連続性を重視する立場に立ち、主に3つの観点を中心として研究を行った。具体的には以下の通りである。

第一に、アメリカの映画史研究家であるチャールズ・マッサーが主張した「スクリーン・ブラクティス」という概念を援用し、中国における初期映画受容史を狭義の映画上映にとどめず、幻灯上映や幻灯講演会のような知的パフォーマンスと接続させることで、映画の教育利用というミリューにおける映画観客の系譜の端緒を拓いた。

第二に、映画を教養としてとらえ、知的に理解しようとする観客層の存在を、映画説明という形から実証した。中国における初期の映画上映では、幻灯上映に付随していた口頭による解説というパフォーマンスを取り込む事例が散見されたが、専門的な説明者を置くという形ではなく、観客のなかで自主的に映画説明を請け負うものが存在した。映画館内の静粛が求められるようになると口頭での説明は次第に「説明書」と称される印刷メディアに転換していった。「説明書」文化はその後20世紀全般にわたって中国映画の上映・興行に不可欠のメディアとなった。映画説明書はこのように重要な印刷メディアであるが、エフェメラルな資料であったがゆえに、公的機関においても網羅的に収集されてはならず、映画説明書を用いた研究はほとんど見られなかった。本研究では映画に関連する重要なメディアとして口頭による映画説明と文字による映画説明書が中国映画史において果たした重要な役割についても考察した。とりわけこうした映画説明行為は観客による自主的な公共圏の創出を可能としたものであったことを明らかにした。

第三に、女性観客によって構築された映画文化のよりアクチュアルな実像を明らかにした。女性観客の映画鑑賞の実態や観客文化の有り様についての考察を妨げる大きな障害は資料の制約であった。しかし、女性の映画鑑賞をより広義的に捉えると、1930年代以降急速に女性読者を獲得していったグラビア雑誌(画報)という新たなメディアにおける映画関連報道を丹念に精査することで、女性の映画観客の映画鑑賞の実像を相当程度実証的に再現することができるように、女性観客の成熟が総合雑誌に近い性質を持つ女性誌を読むという知的行為と連動していたことも実証することができる。本研究はこの立場から、1930年代に発行された女性向けグラビア誌のうち『玲瓏』に焦点を当て、女性読者＝観客が映画にかんするどのような現象に興味を抱いたのか、また映画にかんする事象が女性読者＝観客をとりまく当時のジェンダー規範をどのように変化させたのか、という点に着目し考察を進めた。その結果、ハリウッドの映画女優や中国のローカルな映画ジャンルである武侠映画における「女侠」ものの流行など複数の要因によって女性の男装がささやかなブームを形成していたこと、そしてこの男装ブームのなかに女性読者＝観客の実像とジェンダー観のゆらぎを見出しうることがわかった。

このように、娯楽史や産業史の観点からは不可視化されていた映画の教育・教養的ミリューにおける受容史を掘り起こすことによって、映画が政治プロパガンダの工具としての地位を獲得したのは1930年代のいわゆる「左翼映画」の台頭の後とする従前の映画史における定説は一面的に過ぎないこと、映画がその伝来直後より知的メディアとして受容されていたという事実が後の時代における映画の政治利用を容易にした一因であったことが明らかとなった。

なお、以上の研究成果はいずれも後掲の論文や口頭発表の形式で公表済みである。

(2)「中国映画のグローバル市場」の実態の把握

1920年代に中国映画が初めて日本で劇場公開された経緯と、それを契機として実現した初の日中合作映画の制作の顛末を初めて明らかにした。同時に、1920年代の中国映画のハワイ(ホノルル)及びサンフランシスコへの進出状況について過去の考察の確度をより高め、さらにその歴史的意義を再検討した。中国映画の最大の輸出先は香港及び東南アジアの華僑・華人社会であったことは言うまでも無いが、逆にいえばそうであるがゆえに市場としてはほとんど無視しうる極めて小規模の日本とハワイ、初期のサンフランシスコにおける中国流通状況について顧みられることはほとんどなかった。しかし、本研究では中国映画の海外輸出のパターンには経済的な採算性の追求とは異なる目的をもつパターンが存在していたことを明らかにした。一つは、初期の中国映画の日本における流通・上映状況であり、この場合中国映画の海外輸出は民間における文化交流の促進という公共性の高い文化実践として位置づけることができる。中国映画が初めて日本で興行という形式で上映されたのは1925年のことである。ほぼ同時期に複数の経路で中国映画がもたらされたが、梅蘭芳の来日など折からの中国ブームに乗じたもの以外に、日中知識人の文化交流事業の実践として中国映画が上映されたケースが存在していたことがわかった。

この上映会は、上海の内山書店を拠点として上海在住日本人を中心に結成された支那劇研究会と、そこに参加していた田漢らの劇団・南国社の参加者らによる、文化の相互理解を促進する民間レベルでの交流活動の一環として企画・実施されたものであった。また、これを契機として日活と上海・新人影片公司による初の日中合作映画『神州男児の意気』が制作されたことも明らかにした。1920年代のこのような一連の日中映画交流史を明らかにしたのは本研究が初めてである。他方、1920年代の中国映画がハワイ及びサンフランシスコにもたらされたのもまた経済的利益の追求というよりも、海外華僑・華人の子弟教育という目的が重要であった。特にハワイの場合はホノルルの映画興行において覇権的立場にあった鄭帝恩が、ホノルルを代表する知識人であり、歯科医師としてのみならず政治家としても活躍していたことを明らかにし、ホノルルの華人系コミュニティにおいて映画という新しいメディアを通じてまだ見ぬ祖国の実情を学ぶという大きな需要があった。また、そのように映画がもたらされることで、国民国家として新たに出発した中国の国境を越えたネイション・ビルディングの一つの方法であったこと、1920年代移行に形成されたこのような「想像の共同体」の存在は、1930年代後半以降のハワイにおける抗日映画需要と抗日ナショナリズム醸成の基盤となった。また、この側面においてハワイにおける初期の中国映画上映は(1)で考察したように、映画の教育的利用の側面と強く連動していたことも明らかになった。

(3) 研究遂行の過程で派生的に見出された新たな研究課題

なお、本研究を遂行する過程で、本研究が分析に用いた大量の映画説明書や特刊といった映画関連資料の近代史資料としての価値を評価し、利活用を向上させるという新たな研究課題が派生した。雑誌として扱われ図書館や資料館において比較的網羅的に収集されてきた特刊にたいし、映画説明書はエフェメラルな性質により収集状況が不明である場合が多く、また掲載される情報量の多寡が発行団体の編集方針によって大きなばらつきが見られ、研究上の価値を見出しにくい状況があった。

本研究を遂行する過程で、特刊と映画説明書が明確に分けられないケースがあることが判明した。例えば20世紀前半の上海の映画興行界における有力者であった何挺然の映画館会社が1920年代から1940年代にかけて発行した映画説明書は、系列館で上映される映画の宣伝誌という説明書の基本的な役割のみならず、上映作品に関する付随情報、評論、グラビア、翻案作品などの多様で充実した記事が掲載されていたという点で雑誌や特刊に近い性質を有していた。このような読み物としての価値をもたせた映画説明書は、その後中華電影が日本映画上映館としてリニューアルした大華(ロキシー)大戲院において頒布されていた映画説明書で踏襲されていると思われる。また、映画館でチケットを支払うと映画説明書が贈呈される習慣は東アジアの中国語圏のみならず、東南アジアの華僑・華人社会における華語系映画館においても踏襲されていたことが分かった。すなわち、映画説明書という印刷メディアは大量に渉猟して内容と形式を比較検討することによって、映画鑑賞にかんする観客文化の新たな側面を掘り起こすことができる可能性を持っているといえる。

本研究ではこの新たな課題に関連する研究するために、まず筆者の私蔵する数千枚に及ぶ映画説明書についてメタデータを抽出・データとして入力する作業を進めた。作業は完了していないものの、今後もこれを継続し、広く一般に共有することができる仕組みを整えていく予定である。研究成果としては、大華大戲院の映画説明書『大華』の印刷メディアとしての特徴をまとめた論文を公表した。また、学会やシンポジウムにおいて日本における映画館プログラムに対応する印刷メディアとして中国の映画説明書を位置づける発表を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 菅原慶乃 | 4. 巻 329 |
| 2. 論文標題 「1926：中国電影在日本の第一年」 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 『当代電影』 | 6. 最初と最後の頁 73-80 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 菅原慶乃 | 4. 巻 38 |
| 2. 論文標題 映画と中国社会－映画説明と公共圏 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 『中国－社会と文化』 | 6. 最初と最後の頁 40-57 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 Yoshino Sugawara | 4. 巻 9(1) |
| 2. 論文標題 From teahouse to classroom: Educational screen practice in Republican Shanghai | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Chinese Cinemas | 6. 最初と最後の頁 9-24 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/17508061.2022.2120750 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 菅原慶乃 | 4. 巻 1894 |
| 2. 論文標題 『ワン・セカンド 永遠の二四フレーム』と「人民」の映画の記憶 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『キネマ旬報』 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 菅原慶乃 | 4. 巻 61 |
| 2. 論文標題 「光の教育」――清末民初の上海における通俗教育と幻灯・映画 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『泊園』 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 菅原 慶乃 | 4. 巻 5 |
| 2. 論文標題 [34] 劇場関連資料アーカイブ群が提起する新たな研究の方向について 20世紀前半の日本・中国で発行された映画館プログラムを中心に | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌 | 6. 最初と最後の頁 s172～s175 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24506/jsda.5.s2_s172 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 菅原慶乃 | 4. 巻 第267号 |
| 2. 論文標題 男装するモダンガール--映画『化身姑娘』シリーズと女性観客 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『アジア遊学』 | 6. 最初と最後の頁 10-24 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 菅原慶乃 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 日本映画ファンの「創造」と「建設」：戦時下上海のロキシー（大華）大戲院 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『KU-ORCASが開くデジタル化時代の東アジア文化研究：オープン・プラットフォームで浮かび上がる、新たな東アジアの姿』 | 6. 最初と最後の頁 279-293 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 1件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 菅原慶乃 |
| 2. 発表標題 映画と中国社会――映画観客と国民の創出 |
| 3. 学会等名 中国文化学会シンポジウムシンポジウム「近代メディアは中国社会に何をもたらしたのか？」（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 菅原慶乃 |
| 2. 発表標題 ルサンチマンを纏い、シスターフッドを着こなす――二十世紀前半の中国の女性映画観客と男装 |
| 3. 学会等名 中国女性史研究会11月例会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 菅原慶乃 |
| 2. 発表標題 教育与娛樂之間：早期中国電影史里的銀幕实践 |
| 3. 学会等名 上海市第十五届“都市文化”研究生學術論壇《都市文化与影像傳播》（線上参会）（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 菅原慶乃 |
| 2. 発表標題 男装するモダンガール--雑誌・映画・越劇を往還する女性の読者 / 観客文化 |
| 3. 学会等名 日本現代中国学会第71回全国學術大会テーマ分科会「余暇と娛樂のジェンダー論 - - 身体・空間・メディア」 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 菅原慶乃 |
| 2. 発表標題 「光の教育」--清末民初の上海における通俗教育と幻灯・映画 |
| 3. 学会等名 関西大学泊園記念講座（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 菅原慶乃 |
| 2. 発表標題 劇場関連資料アーカイブ群が提起する新たな研究の方向について 20世紀前半の日本・中国で発行された映画館プログラムを中心に |
| 3. 学会等名 デジタルアーカイブ学会第1回DAフォーラム |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 菅原慶乃 |
| 2. 発表標題 関西大学・アジアの映画関連資料アーカイブについて |
| 3. 学会等名 オンラインシンポジウム「デジタル時代の映画館プログラム データベース公開と活用の可能性」（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 菅原慶乃 |
| 2. 発表標題 孤島・占領期上海における映画特刊と説明書：ノンフィルム資料活用の事例として |
| 3. 学会等名 科研費・基盤研究（B）「貫戦期における日中映画の越境と協働をめぐる総合的研究」（20H01222、研究代表者：アンニ氏）研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 菅原慶乃 |
| 2. 発表標題 「肉感」と「健康美」のはざま：民国期上海映画とジェンダー表象 |
| 3. 学会等名 中国ジェンダー研究会第24回例会 |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 大濱慶子, 菅原慶乃, 趙怡, 江上幸子, 須藤瑞代, 横山政子, 星野幸代, 須佐多恵, 中山文, 陳鳳, 游鑑明, 杉本史子, 石川照子 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 國立臺灣大學出版中心 | 5. 総ページ数 320 |
| 3. 書名 『中國的娛樂與性別：女性之「變」』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 YVES GAMBIER ANA HAINAJIN eds., MARKUS NORNES AND NAKAJIMA SEIO, JOSH STENBERG, KYUNG HYE KIM, MARTIN MHANDO, HELENA CASAS- TOST AND SARA ROVIRA- ESTEVA, GONG ZHANG, ANNA DI TORO, ISABEL WOLTE, CAROL O' SULLIVAN, CAMERON L. WHITE, YOSHINO SUGAWARA, YUFEI TAI ZHANG | 4. 発行年 2024年 |
| 2. 出版社 Routledge | 5. 総ページ数 268 |
| 3. 書名 Chinese Films Abroad: Distribution and Translation | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|--|
| <p>近現代中国研究に役立つデジタル・リソースガイド 新聞編 https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/131841/eea5f4658f33f2eb5f17c83c153eb3d9?frame_id=592828 近現代中国研究に役立つデジタル・リソースガイド 雑誌・書籍・その他編 https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/131841/07ff75c7a353a345c74d556e39285c37?frame_id=592828</p> |
|--|

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---------|------------|--|--|--|
| 中国 | 浙江大学寧波理工学院 | | | |
| 中国 | 拙稿大学寧波理工学院 | | | |